

第2回“楽しむ科学コンクール”審査結果のご報告

平成20年3月28日

楽しむ科学コンクール選考委員会 代表者

東京大学 駒宮 幸男

東京大学 森 裕司

平成19年度第2回“楽しむ科学コンクール”採択プロジェクト1件の試行が完了いたしましたので、それについての審査を平成20年3月10日、東京大学にて行いました。

採択プロジェクト名：「野生テナガザルの歌の意味を探る」

代表：井上陽一氏（京都府立西舞鶴高等学校 教諭）

審査に参加いただいた委員は次の6名です。

<選考委員（五十音順）>

岡村 定矩（東京大学教授・副学長）

朽津 耕三（東京大学名誉教授）

駒宮 幸男（東京大学教授・平成基礎科学財団理事）

森 裕司（東京大学教授・平成基礎科学財団理事）

森 亘（元東京大学総長・平成基礎科学財団評議員）

山本 智（東京大学教授）

まずプロジェクトの代表者から実施状況と成果に関してプレゼンテーションをしていただき、それに対する質疑応答をいたしました。その後の審査内容は以下の通りです。

本研究は、ボルネオに生息するテナガザルの群れを追跡し、彼らの鳴き交わす「歌」を録音採取して「歌」の構造を解析することで、その法則性と音声コミュニケーションの実態を解明することを目的として行われた。

現地、マレーシア領ボルネオ島ダナムバレーにおけるフィールドワークは、高校教諭としての業務の合間を縫っての調査のため短期間ではあったが、得られたデータは充実したものであり高く評価された。なお選考委員会において、音声や行動に関するデータの解析方法などいくつかの点で改善の余地があることが指摘されたので以下に列举した。

(1) 音声データの解析方法については様々な改善の余地があり、エレメントのとり方等の工夫により明確な分類と生物学的意味付けが可能性になると考えられる。

(2) 人による追跡調査がテナガザルの本来の行動様式に何らかの影響を与えている可能性が否定できない。代表者らによればサルは高い樹上に生息しており、かつ人間は危害を加えない存在であることを知っているので問題はないという回答ではあったが、この懸念を払しょくするにはさらに詳細な検証が必要であろう。

(3) それぞれの「歌」の要素がどのような状況で発現するのかを解明すべきである。音声の録音と同時に、サルの行動を詳細に記録し、両者の対応について解析する必要があるだろう。

(4) 子供のサルが親ザルの歌を模倣しているように思われ興味深いですが、分析のためには今後さらに多くのデータを採取する必要がある、また適切な分析方法についても十分に吟味すべきであろう。

本研究では、提唱されたいずれの仮説もその検証は今後の課題ではあるものの、さまざまな制約のなか熱心なフィールドワークを重ねることによって、野生テナガザルの音声コミュニケーションに関する興味深くまた示唆に富んだデータが得られた。将来の研究発展が楽しみである。

選考委員会は、以上を鑑みて、井上陽一氏の研究に対する熱意と努力に対して、金三十万円を贈ることに決定いたしました。

“楽しむ科学コンクール”は以下の趣旨で創設されましたので、最後にもう一度あらためてお知らせしておきます。今年の秋には第4回の公募を行う予定ですが、たくさんのプロジェクト応募があることを今から心待ちにしております。

“楽しむ科学コンクール”の趣旨

科学の探究には終わりがなく、極めれば極めるほどより深奥な世界が広がっていきます。また、科学は意外性に満ちあふれています。基礎科学はその宝庫であり、だから面白いのです。この醍醐味をぜひ多くの方々に体感していただきたい。これが“楽しむ科学コンクール”創設の動機です。基礎科学とくに広い意味の理学（自然科学）分野の研究に対する興味と関心を広く呼び起こす目的で、研究（または教育）プロジェクトを公募し、厳正な審査を経て採択されたプロジェクトには実施費用（上限100万円）を支給してプロジェクトを実施していただきます。一年後に成果を発表いただき、とくに優秀なものに対しては顕彰いたします。応募は一人でもグループでも結構です。代表者が研究・教育分野の専門家である必要もなければ学位をもっている必要もありません。プロジェクトの代表者が20歳以上であることだけが応募資格です。皆さまからの独創的なアイデアに満ちた応募をお待ちしております。

（本コンクールの実施母体は、国立大学法人東京大学理学部及び同素粒子物理国際研究センター、並びに財団法人平成基礎科学財団です）